見棄てられている粉じん対策

埃の出ない設備を

現状ではじん肺患者続発？

各指導部の職場新聞はもちろんのこと、本紙もまたくり返し記事で「職場の粉じん対策」の急務なことについて警告しつづけている。にもかかわらず出炭にばかり目のくらんだ会社は、この緊急を要することには見向きもせず、じん肺患者多発の危険性が、坑内にも坑外にもうちつづいている。

坑外からあがった叫び

職場新聞〝はぐるま〟（三川指導部坑外職場）が会社に対し、長く、「職場の粉じん対策」の急務なことについて叫びつづけていることは、広く知られている。

その〝はぐるま〟が三月十五日発行号でまた、「要請の中で話し合われた粉じん対策について、いまもって何一つ具体工作がなされていないのはどうしたことか」として、職場（もちろん坑外）における粉じんの実態を告発している。

「サンダーグラインダー（研磨機）はやたらと屋内で使用され、前時代的な薪ストーブからは油煙が、排煙装置もないまま職場の内外にうずまく」

三川鉱坑内は

坑外がこれだから、坑内はさらにひどく、次は三川鉱の一坑内職場に見られる実態――

「プラント座（フライアッシュを水と混ぜ合わせるところ）に、フライアッシュが函で次から次に送られてくる。

払の進行が早くなるにつれ、流送充てん作業も回転を早める。

プラント座に働く人も、運搬工も、仕繰工も同じ。目といわず、口といわずザラザラで真っ白になる。

フライアッシュの中には、硅酸分が一八パーセントもあるとか。

体内の肺の中に飛びこみ、固まってしまうくらいわけはない。

そう考えると恐しくなり、プラント座にいた私はいそぎタオルを鼻にあてがい、後ろでしっかり結んだ。

とたんに入気道の方から〝おーい、おーい、こっちにこんか〟と声をかける人がいる。

私は声につられ、あわてて入気道にでる。私を呼んだのは――。姿が見えぬ」（三川指導部七分会新聞〝あせ〟三月十五日発行）

宮浦鉱坑内は

宮浦鉱でも、問題はまったく三川鉱と同じ。宮浦指導部電気分会新聞〝交流〟（三月二十四日発行）は、次のように述べている。

「宮浦鉱の保健係では、最近防じんマスクを借用する人が急増した、と驚いている。

払跡のフライアッシュ充てんから岩盤の〝から掘り〟（水をまかずに行なうところから、この言葉が生れた）から、また乾燥しきった坑道を通るわれわれの足もとから、ものすごいホコリに見舞われる。

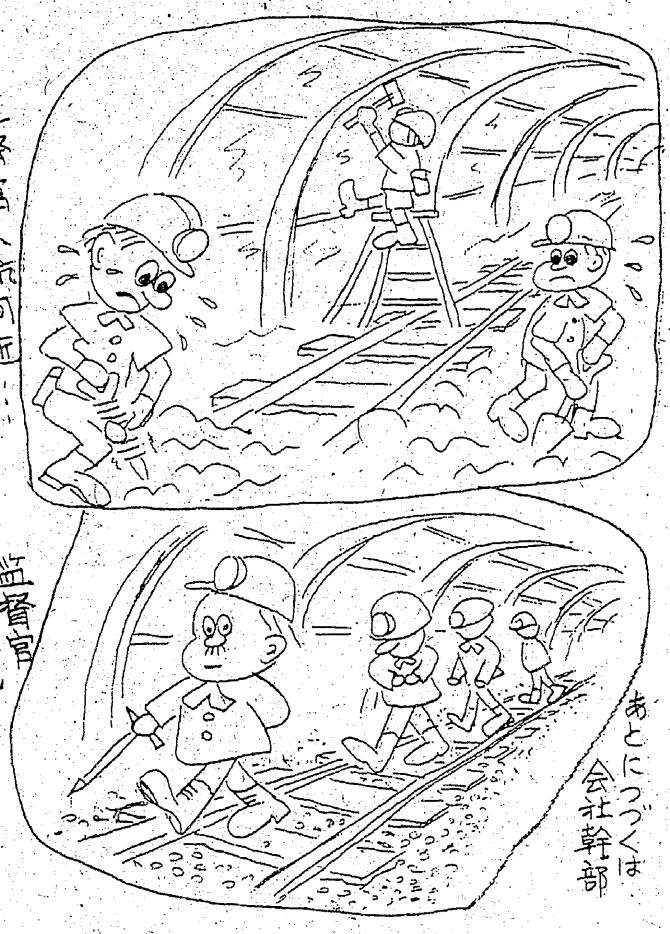
そのホコリは、現場から三十七昇のマンベルト（作業員の乗用ベルト）を降りるまで、われわれをとらえて離さない。大量のじん肺患者をつくりだすことは、まず間違いはなかろう。

フライアッシュは、固まるのに約五時間ぐらいかかり、〝石膏〟（払跡充てん用）はある物質と混ぜ合わせると二時間ぐらいで固まるとのこと。フライアッシュや石膏で固められるのは、果たして払跡ばかりだろうか」

対策をいそげ

フライアッシュの分析の結果、硅素分が一八パーセントも含まれているという。それを充てんするためには、坑道で一メートル先も見えないくらいに粉じんが舞う。

八幡製鉄の粉じん職場でマスクに使用したタオルから、ガン要素となる化学物質が検出された。停年退職後の人びとの死因を究明して、二十数人の遺族が裁判にもちこみ、闘っている。（新聞〝はぐるま〟による）



保安監督官殿の――

お出ましだゾ

宮浦指導部八分会新聞〝もっこす〟（NO・六六）から。

×

坑内は、岩粉散布で一面の雪化粧。すると一両日中にはちゃんと保安監督官殿のお出ましだ。

岩粉散布は、監督官のために行うものと、近頃では労働者までが錯覚を起こしている。そりゃそうだ、監督官がこない時には岩粉はまかないもんだから、だんだんそうなってしまった。

現在宮浦鉱四十部内の本延坑道にバッテリー電車を入れようと、その許可を取るため、連日この坑道一本に大がかりな人員を投入して整備に余念がない。

車道の中を掘り返してバラスを入れ、保安規則の規定にもとずく幅をとるため、枠脚の入れ込み作業中。官庁検査に合わせて大変だ。

検査の前ともなると、ほうきで枕木の上を、一枚一枚掃いて回ることになる。ものすごい神経の使いよう。とにかく検査に合格せんなら本社からお叱りが飛んでくる。現場の係員は日程に追われて可哀いそうなぐらいに頭を痛め、工事をいそいでいる。

元来保安とは働く者のためにあり、坑道整備もそのためのものであるはず。監督官に、注意を受けないためのものではない。

北から南から

岡野バルブ合理化ハネ返す

これから春闘というとき、全国金属組織下の数多くの組合が資本の合理化攻撃に直面しているが、その一つ――岡野バルブ支部（北九州市）は、ストライキ権をバックに闘った末、会社の合理化案をハネ返すことに成功した。

「今回の合理化案は金庫に入れて凍結する。したがって組合方針と同じ、と理解してもらってよい」、というのが会社側の回答。（二月二十四日の団交で）、

ガン死のじん肺患者公傷に

滋賀県の田中さん（名まえ不詳）がガンで死亡したのについて、その遺族が公傷認定を勝ち取り注目されている。

田中さんは亜鉛鉱山で働くうちにじん肺にかかり療養中のところ胃ガンを併発、死亡した。

遺族はさっそく八日市労働基準監督署に対して遺族補償を請求。ところが同監督署は、「じん肺と胃ガンの因果関係なし」と却下。

そこで遺族は「じん肺で体が衰弱していたために胃ガンの手術ができなかったのだから、業務上だ」と主張、右監督署の決定に対し不服審査を行なっていたもの。

「じん肺による心肺機能低下のため、胃ガン発見時に手術ができなかった、というのがもっともである」というのが、審査委員会の結論で、「ゆえに、死因は業務上疾病によるものである」、としたもの。

パンフを売って資金づくり

いま三井鉱山と山野炭鉱（いまは閉山）の経営者を相手どり、会社の災害責任追及と損害賠償請求裁判を起こす準備を進めている、山野炭鉱遺族会は、このほど〝地底〟というパンフレットをつくり、希望者に分かつなどしながら、闘争資金づくりに努力している。

〝地底〟の内容は、当時の新聞の記事や、遺族の声、遺族会の闘いの模様など。

希望者は、「福岡県嘉穂郡稲築町平中籠七一〇番地。電話―〇九四八四―二―六六九四」の山野炭鉱遺族会事務所に連絡されたく。

ある夜――

夫婦の対話

妻…あんた坑内に下がりよるとじゃろだい。

夫…毎日下がりよるくさ。

妻…それにしちゃ、賃金の安かねエ。（一カ月二十四方出勤して、小計十三万五千円也）

夫…坑外や社外工の人たちは、もっと安かつぞ。

妻…こんどの春闘で、どのくらいあがるじゃろかね。

夫…やって見らんことにはわからんた。

妻…何しろ、要求の百パーセント取れたことはなかもんね。新労組員の人たちは、どげんいいよらすね。

夫…まアだあんまり、関心のなかごたるぞ。

妻…何とかして、もう少し給料の上がらんとでけんばってんね。

夫…本番は、今からじゃけんね。

妻…期待しとるとよ。

×

新聞〝日刊宮浦〟の三月二十三日発行号に掲載されていた、「ある夜の夫婦の対話」です。

新聞〝交流〟（前記）の記事は「フライアッシュ充てんは、埃のでない完全な設備のもとで行なえ」「水洗窄孔を徹底させ、カッター、ローダーの散水設備を有効完全なものにせよ」――と要求しているが、会社は一日も早く誠意をもって粉じん対策を講ずべきである。後からでは遅い。

一度みにいきたい大牟田川

千葉　坂本アツエ

長い寒さでございました。やっと暖くなり、桜の花も咲きはじめることでしょう。

お変りありませんか。あそんでいても、ご無沙汰ばかりですみません。

先日CO守る会から、会費が終ったといってきました。おそくなってすみません。会費を同封しますのでお手数かけますが、よろしくお願いします。

時に大牟田川がきれいになって魚が住むようになったとききましたが、ほんとうですか。信じられないようです。あのくさいドブ川がね。

産業の発展とともに川までよごして、私達がいる時には、それが大牟田川の当たり前の姿みたいだったですね。

よかった。いつか、きれいになった川を見にいきたいと思っています。

会社の方はなお大変なようすですから、お体に気をつけてがんばって下さい。

×

坂本さんは、もと三井勝立分院に看護婦として働いていた人で、現在「千葉県八千代市八千代台北四の一七―五」にお住まいです。

右のお便りは、新勝立町一―二八の椿定さん（宮浦指導所）あてに寄せられたものですが、心厚いご支援に心から感謝いたします。

×